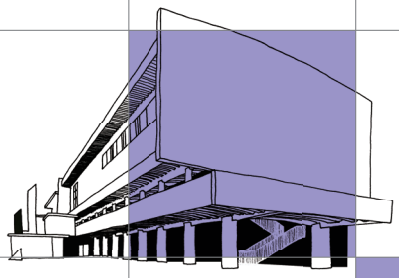
独立行政法人

国立美術館

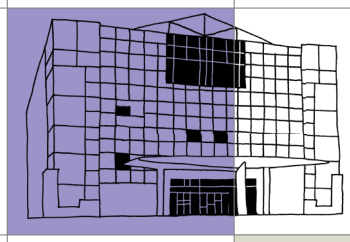
Independent Administrative Institution
NATIONAL MUSEUM OF ART

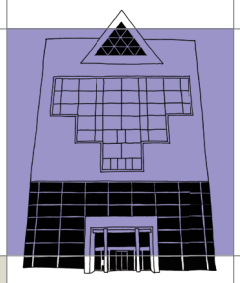


東京国立近代美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF MODERN ART, TOKYO

国立工芸館
NATIONAL CRAFTS MUSEUM

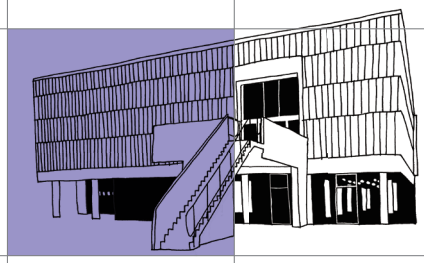
京都国立近代美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF MODERN ART, KYOTO

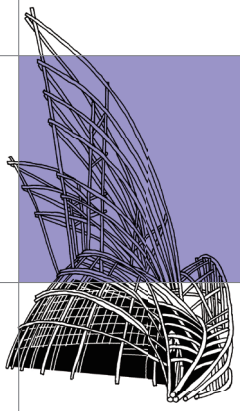




国立映画アーカイブ
NATIONAL FILM ARCHIVE OF JAPAN

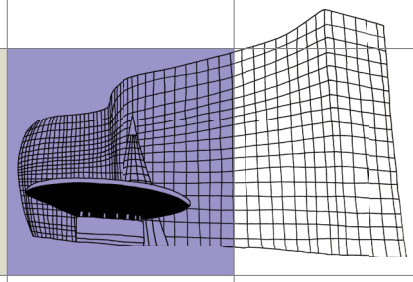
国立西洋美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF WESTERN ART, TOKYO





国立国際美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA

国立新美術館
THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO



国立アートリサーチセンター
NATIONAL CENTER FOR ART RESEARCH

ご挨拶

撮影：樋口俊太

田中 正之
独立行政法人国立美術館理事長
（国立西洋美術館長、国立アートリサーチセンター長）

独立行政法人国立美術館は、東京国立近代美術館、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、国立国際美術館、国立新美術館、国立アートリサーチセンターの各施設・機関を設置・運営し、日本の美術振興に寄与する中心拠点として、美術や映画作品の調査研究、保存管理、展示・上映、教育普及、情報資料の収集と発信やアーカイブ化など、様々な活動に取り組んでいます。

それぞれの機関は、各施設のミッションやヴィジョンに基づいた収集活動を通して、美術と映画に関わる日本のナショナル・コレクションを充実させることで文化的遺産を後世へと伝えつつ、作家や作品についての調査・研究も進めています。収集や研究の成果を積極的に発信し、国際的なネットワーク構築にも努めています。また多様な鑑賞機会を提供しうる特色のある展示や上映を行うことで、国内外の方々に日本そして世界の美術や映画への理解を深め、親しんでいただくための事業を実施しています。

国立美術館にとどまらず、国内にある他の美術館とも連携することで、作品活用の促進や情報の集約と発信等を、国立アートリサーチセンターを中心に展開し、国内美術館のナショナルセンターとしての機能強化にも取り組んでいます。

日本の芸術文化の創造と発展を使命に、あらゆる人々に開かれた美術館を目指し、社会的課題の解決など美術館が果たすべき新たな役割にも向き合い、国立美術館としてなすべき充実した活動を展開しています。

令和8年度は、新中期目標・中期計画の初年度として、今後の取組の基盤を築く重要な一年となるだけでなく、法人運営の在り方が改めて問われる年でもあることを踏まえ、中期計画及び年度計画に基づく施策を着実かつ丁寧に推進してまいります。

近年、国際情勢や社会環境は大きく変化し、不確実性の高い時代を迎えています。世界各地での緊張の高まりや経済環境の変動は、私たちの日常生活のみならず、文化芸術を取り巻く環境にも様々な影響を及ぼしています。

このような時代だからこそ、人々が立場や価値観の違いを超えて想像力を育み、互いを理解し合うための場として、美術館が果たす役割は一層重要になっていると考えています。美術や映画は、時代や国境を越えて人の心に語りかけ、新たな視点や気づきをもたらす普遍的な力を有しています。私たちは、美術館を単なる鑑賞の場にとどめることなく、誰もが気軽に集い、学び、対話できる開かれた文化の拠点として育んでいきたいと考えています。多様な表現に触れる機会を通して、心の豊かさや創造性を育み、社会に前向きなつながりを生み出すことが、今を生きる私たちに求められている使命です。これからも、変化する社会に柔軟に向き合いながら、文化芸術の持つ多様な価値を次世代へとつなぎ、持続可能で心豊かな社会の実現に貢献できるよう、活動を重ねてまいります。

国立美術館について

使命と役割

独立行政法人国立美術館は、我が国における芸術文化の創造と発展、国民の美的感性の育成を使命とする、美術振興の中心的拠点です。東京国立近代美術館、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、国立国際美術館、国立新美術館、国立アートリサーチセンターを設置し、次の役割を果たすために、個性豊かで多彩な活動を展開しています。

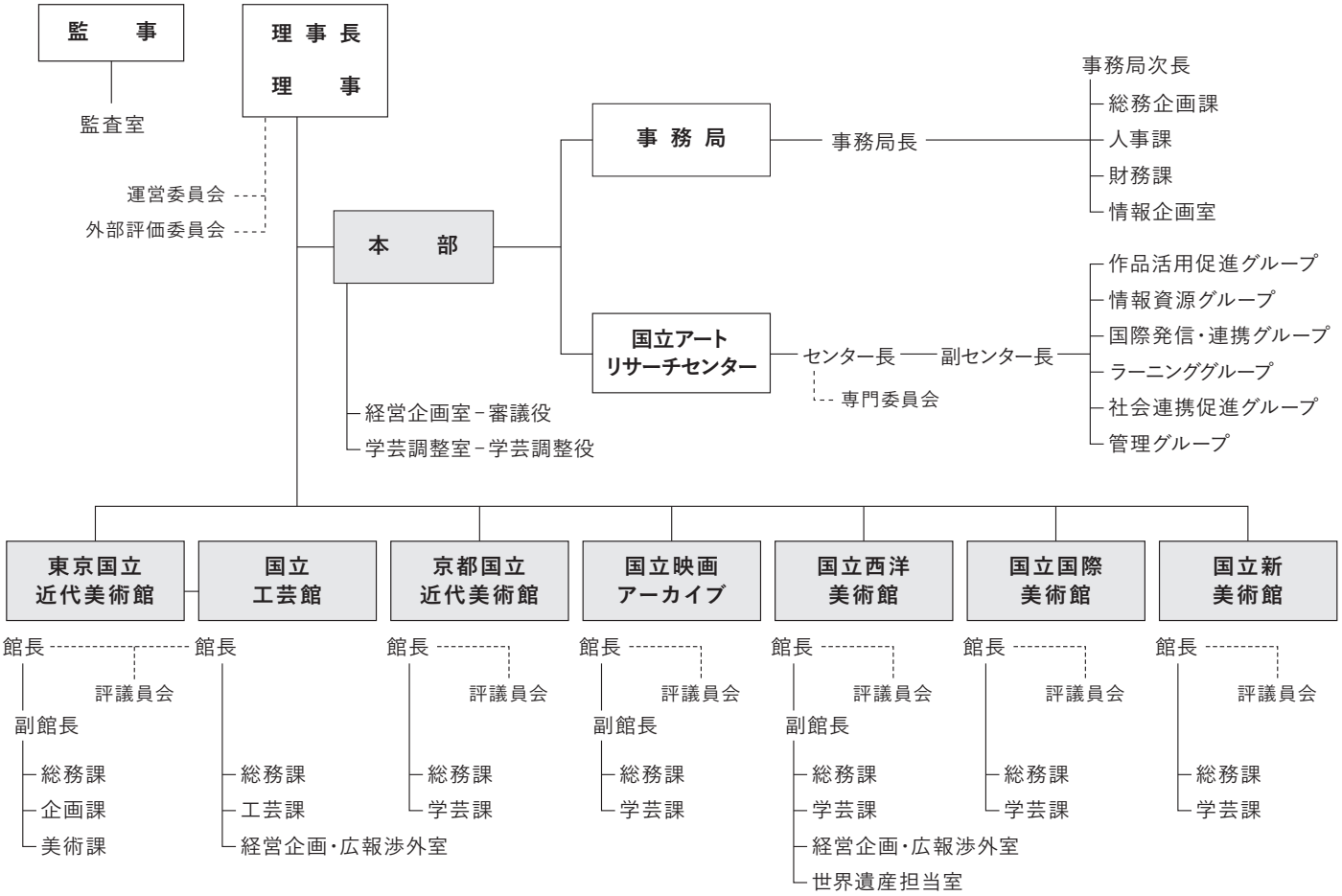
① 美術振興の中心的拠点として、多様な鑑賞機会の提供、多彩な活動の展開
② ナショナルコレクションの形成・活用・継承
③ 美術館活動全体の活性化に寄与するナショナルセンターとしての活動に取り組むこと

沿革

昭和27年(1952)	国立近代美術館が開館 事業課の一部としてフィルム・ライブラリーを開設
昭和34年(1959)	国立西洋美術館が開館
昭和38年(1963)	国立近代美術館京都分館が開館
昭和42年(1967)	国立近代美術館が東京国立近代美術館となる 国立近代美術館京都分館が館として独立、京都国立近代美術館となる
昭和44年(1969)	東京国立近代美術館にフィルムセンターを設置
昭和52年(1977)	国立国際美術館が開館 旧近衛師団司令部庁舎に東京国立近代美術館の分館として工芸館が開館
平成13年(2001)	東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館からなる「独立行政法人国立美術館」発足 国立美術館本部設置
平成19年(2007)	国立新美術館が開館
平成30年(2018)	東京国立近代美術館フィルムセンターが国立映画アーカイブとして独立
令和 2 年(2020)	工芸館が金沢に移転し、国立工芸館として開館
令和 5 年(2023)	国立アートリサーチセンター設置

組織図

(令和8年4月1日現在)



国立美術館の事業

多様な鑑賞機会の提供

1. 各美術館等の特色を生かした展覧会等の実施

国立美術館では、調査研究の成果を活かし、所蔵するコレクションを新しい切り口から多角的に展示する「所蔵作品展」や、世界の美術動向の紹介や我が国の作家・作品の再評価等を目的とする「企画展」などの展覧会を実施しています。また、マンガ・アニメなどメディア芸術や現代美術を含む様々な展覧会も行っています。

●所蔵作品展

MOMATコレクション　小企画「フェミニズムと映像表現」
：東京国立近代美術館

1970年代から現代までのフェミニズムに関わる映像表現を、出光真子、ダラ・バーンバウムなど8組の作家による作品で紹介しました。
（会期：2024/9/3～2024/12/22）
（令和6年度所蔵作品展総入館者数：227,698人）

「コレクション1　彼女の肖像」
：国立国際美術館

撮影：福永一夫

ジェンダーの観点から所蔵作品の見直しが大きなテーマになっている中で、作品に登場する女性像に焦点をあて、どのような社会や歴史、関係性が表象されているかに注目しました。
（会期：2024/11/2～2025/1/26）
（令和6年度所蔵作品展総入館者数：45,446人）

●企画展

「没後100年　富岡鉄斎」
：京都国立近代美術館

撮影：河田憲政

幕末から大正期まで京都で活躍した文人画家富岡鉄斎の没後100年を記念し、作品とともに印章、スクラップブック、煎茶道具、旧蔵図書なども取り上げ、従来知られていなかった側面にも光をあてました。
（会期：2024/4/2～2024/5/26、入館者数：28,363人）

「モネ　睡蓮のとき」
：国立西洋美術館

撮影：上野則宏

パリのマルモッタン・モネ美術館の所蔵作品およそ50点に、国立西洋美術館をはじめ日本各地に所蔵される作品を加えた、計64点のモネの絵画を紹介しました。
（会期：2024/10/5～2025/2/11、入館者数：807,566人）

●新しい美術の動向に関する展示

「ポケモン×工芸展―美とわざの大発見―」
：国立工芸館

テーマは「ポケモンと工芸の真剣勝負」。人間国宝から若手まで20名のアーティストが挑んだ作品を展示しました。
（会期：2023/3/21～2023/6/11、入館者数：95,158人）

2024 Pokémon. ©1995-2024 Nintendo/Creatures Inc. /GAME FREAK inc.
ポケットモンスター・ポケモン・Pokémonは任天堂・クリーチャーズ・ゲームフリークの登録商標です。

「LOVEファッション―私を着がえるとき」
：京都国立近代美術館

撮影：浅野豪

京都服飾文化研究財団の18世紀から現代までの衣装コレクションを中心に、現代美術、文学作品を交えて、ファッションに託された人々の多様な願望を見つめ直すとともに、着る側である「私」をめぐる問いの現在形を探りました。
（会期：2024/9/13～2024/11/24、入館者数：37,659人）

「リビング・モダニティ　住まいの実験 1920s-1970s」
：国立新美術館

展示風景　撮影：福永一夫

20世紀にはじまった住宅をめぐる革新的な試みを、衛生、素材、窓、キッチン、調度、メディア、ランドスケープという7つの観点から再考し、世界各地のモダン・ハウスの傑作14邸を中心に、20世紀の住まいの実験を、写真や図面、スケッチ、模型、家具、テキスタイル、食器、雑誌やグラフィックなどを通じて多角的に検証しました。
（会期：2025/3/19～2025/6/30、入館者数：138,432人）

「CLAMP展」
：国立新美術館

「CLAMP展」国立新美術館 2024年 展示風景 ©CLAMP·ShigatsuTsuitachi CO.,LTD. ©C,ST/CEP

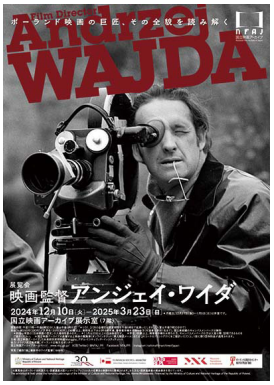
少年漫画、少女漫画、青年漫画を横断して多様な漫画作品を世に送り出し、またときには漫画という枠を超えて独自の表現を追求し続けてきた女性4人の創作集団CLAMPの35年の創作活動の軌跡を、貴重な原画・資料約800点を通じて紹介しました。
（会期：2024/7/3 ～ 2024/9/23、入館者数：248,005人）

●映画上映、映画関連展覧会

上映会
「メキシコ映画の大回顧」
：国立映画アーカイブ

メキシコ国立自治大学（UNAM）フィルモテカ他との共催により、メキシコ無声映画期の代表作『灰色の自動車』（1919）から1980年代までの話題作54本を上映しました。
（会期：2025/1/7～2025/2/9、入館者数：7,360人）

展覧会
「映画監督
アンジェイ・ワイダ」
：国立映画アーカイブ



ポーランドの諸機関との共催により、映画によるポーランド史の雄弁な語り手として壮大な物語世界を構築してきた巨匠監督アンジェイ・ワイダを紹介しました。
（会期：2024/12/10～2025/3/23、入館者数：5,232人）

2. 全国の公私立美術館と連携した展覧会の実施

公私立美術館と連携して、国立美術館の所蔵コレクションを公私立美術館に貸し出し、連携先美術館と展覧会を共同企画すること等により、地域におけるナショナルコレクションの鑑賞機会を充実するとともに、地域の美術館の活性化を支援する取組を行っています。また、優れた映画の巡回上映も行っています。

●コレクション・ダイアローグ

国立美術館 コレクション・ダイアローグ
Collection **DIALOGUE**

国立美術館のコレクションに連携先美術館のコレクションを加え、共同で企画・構成する展覧会です。令和７年度から実施します。

●巡回展

国立美術館の所蔵作品を中心として、連携先美術館とともに企画する展覧会です。

「超絶技巧からモダンへ　京都・近代工芸の新展開」
：長崎県美術館

「超絶技巧からモダンへ」と変化していく工芸の「近代」に焦点を当て、京都国立近代美術館から明治の工芸を始め日本画や洋画も含めて約160点を貸し出し、長崎歴史文化博物館が所蔵する長崎の工芸10点とあわせて展示しました。
（会期：2025/1/17～2025/3/16）

●コレクション・プラス

国立美術館 コレクション・プラス
Collection **PLUS**

連携先美術館のコレクションに国立美術館の所蔵作品1点から数点を加えて構成する展覧会です。

「刑部人とギュスターヴ・クールベ　風景画家たちの眼」
：栃木県立美術館

国立西洋美術館のギュスターヴ・クールベ《波》《雪景色》を貸し出し、栃木県立美術館所蔵の刑部人の風景画とあわせて展示し、その影響関係を明らかにしました。
（会期：2024/10/26～2024/12/22）

●巡回上映

優秀映画鑑賞推進事業
：国立映画アーカイブ

全国各地の公立文化施設等97会場にて、35㎜フィルム等による日本映画の巡回上映を実施。100作品25プログラムのなかから会場の希望に応じて上映しました。
（会期：2024/7/18～2025/3/2）

こども映画館
スクリーンで見る
日本アニメーション!
：国立映画アーカイブ

（一社）コミュニティシネマセンターと共催で、こどもも大人も楽しめる日本アニメーション映画の上映会を各地で開催しました。
（会期：2024/7/13～2024/11/2）

3. 現代作家や国が顕彰・育成してきた芸術家のための発表機会の提供

これからの我が国の芸術活動を牽引する優れた芸術家や現代作家に発表の機会を与え、積極的な紹介を行っています。

「荒川ナッシュ医　ペインティングス・アー・ポップスターズ」：国立新美術館

展示風景　撮影：中川周

日本出身でアメリカ在住のパフォーマンス・アーティスト、荒川ナッシュ医（あらかわなっしゅ・えい）の活動をアジア圏の美術館では初となる個展として紹介し、会期中はほぼ毎日アーティスト自身によるパフォーマンスやトークを開催しました。また、個展でありながら、他の現代作家の活動が荒川ナッシュとのコラボレーションとして紹介され、現代美術の表現の多様なあり方を発信する機会となりました。
（会期：2024/10/30～2024/12/16、入館者数：43,683人）

「NACT View 04　和田礼治郎：FORBIDDEN FRUIT」：国立新美術館

撮影：宮島径

パブリックスペースを活用した小展示シリーズ「NACT View」では、新進芸術家海外留学制度（2008年）を経てベルリンを拠点に活動する和田礼治郎のインスタレーションを前年度に引き続き実施し、幅広い層の来館者に現代美術に触れる機会を提供しました。
（会期：2024/1/24～2024/6/10）

4. 快適な観覧環境の提供

美術作品を直接鑑賞する機会を充実させるため、多様な方々に美術館に来ていただけるよう、美術館へのアクセシビリティを高める取組を推進しています。このため、館内表示やリーフレット、展示解説や音声ガイドなどの多言語化、多言語による所蔵作品展チケットのオンライン販売を進めるとともに、施設のバリアフリー化などを進めています。また、ガイドアプリ「Bloomberg Connects（ブルームバーグ・コネクツ）」と連携し、展示や作品解説、館内施設・サービス紹介などの音声や動画を含むコンテンツを提供しています。これらは40以上の言語に自動翻訳され、来館者は自身のスマートフォンを用いて無料でご利用いただけます。

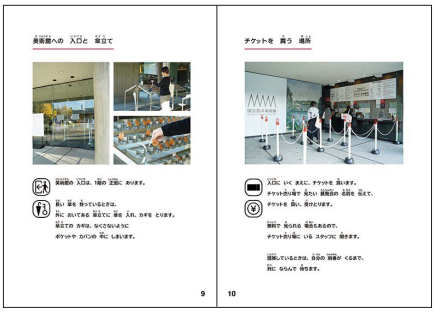
ガイドアプリ「Bloomberg Connects（ブルームバーグ・コネクツ）」：東京国立近代美術館、国立国際美術館、国立新美術館

各館窓口における筆談対応

周りの目が気になって、美術館に子どもを連れて行きにくいという声をうけ、子ども連れ来館者向けの特別な日を設定し、子ども連れで鑑賞しやすい環境づくりにも力を入れています。また、鑑賞ツールの配布や子ども向けワークショップの開催、特別な鑑賞プログラムの提供などを行うとともに、所蔵作品展の高校生以下又は18歳未満の子どもの入場料を無料としています。発達障害のある方とその家族に向けた、やさしい文章と写真による来館案内冊子「ソーシャルストーリー」も作成しています。

「にぎやかサタデー」：国立西洋美術館

来館者案内冊子「Social Story はじめて美術館にいきます。」



ナショナルコレクションの形成

国立美術館は、我が国の近現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションを形成し、これらの貴重な国民的財産を適切に保存・管理し、確実に後世に継承します。

1. 作品の収集

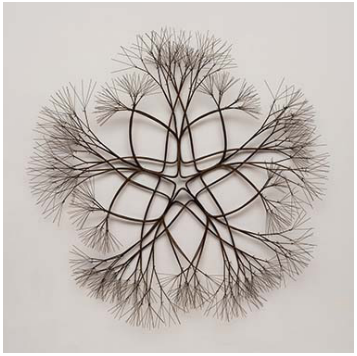
国立美術館では、各館において定めた収集方針に基づき、外部の知見も参考に、価格の妥当性等に検討しつつ、体系的・通史的にバランスの取れた所蔵作品の充実を図っています。近年は、コレクションのジェンダーバランスの確保や作家の地域性等の観点を重視するとともに、国内外の有望現代作家作品の同時代収集にも取り組んでいます。

1　撮影：品野塁

2

3

4



5　撮影：福永一夫

1. **金森宗七《花鳥文様象耳付大花瓶》1892年頃**
   1900年パリ万国博覧会出品作。国内外の博覧会で受賞を重ね、高岡銅器の基礎を築いた金森宗七による委嘱で制作されました。西洋に日本金工の質の高さを発信するため考案された独特な文様や装飾が施されており、当時の日本における海外貿易戦略やジャポニスムの形成過程を知るうえでも重要な作品です。（国立工芸館所蔵）

2. **ラヴィニア・フォンターナ《アントニエッタ・ゴンザレスの肖像》1595年？**
   フォンターナは、西洋美術史において本職の画家として最初に成功を収めた女性として知られます。本作には、多毛という特異体質から欧州各地の宮廷で有名になったカナリア諸島出身の一家の少女が描かれています。表情や衣服の装飾を精緻かつ色鮮やかに描き出す手法は、この画家ならではのものです。（国立西洋美術館所蔵）

3. **横山大観《迷児》1902年**
   大観が34歳で描いた初期作品であり、岡倉覚三（天心）の指導のもと、日本美術院のグループが目指した新しい「日本画」の性格を示す象徴的な作品。（東京国立近代美術館所蔵）

4. **安井曽太郎《晩秋の湯河原》1952年**
   明治から昭和にかけて活躍し、梅原龍三郎とともに「安井・梅原時代」と呼ばれる一時代を築いた安井曽太郎が、文化勲章受章の年に制作した風景画です。療養のため湯河原に住んだ晩期の安井はそのアトリエから見える景色を繰り返し絵にしました。（京都国立近代美術館所蔵）

5. **ルース・アサワ《無題（S.317、壁掛け式、中央部は開いた五芒星と枝が重なりあう形にワイヤーを縛ったもの）》1965年頃**
   ワイヤーを編んで作る立体作品で知られるアサワの、植物をモチーフとした代表的な作例の一点。近年国際的に再評価が進む、日系アメリカ人である女性作家の作品を、ルーツのある日本の美術館において初めて収蔵しました。（国立国際美術館所蔵）

2. 所蔵作品の保存・修復

貴重なナショナルコレクションを後世に確実に受け継ぐため、作品の保存・修復は重要な課題です。国立美術館では作品の科学的調査を行い、その構造、材料・技法、劣化状態を把握して適切な保存環境を整えるとともに、民間の修復家と連携しつつ、特に緊急性の高い作品に重点をおいて修復を進めています。また、所蔵作品の保管には民間の倉庫も活用しています。

デジタルマイクロスコープによる絵画表面の観察
：国立西洋美術館

絵画作品修復の様子：国立西洋美術館

現代美術作品修復の様子：国立国際美術館

教育普及活動の充実

学校やボランティアと連携し、できるだけ多くの方にご参加いただけるプログラムや、障害のある方・訪日外国人などあらゆる立場の方を対象とするプログラムを実施しています。教育的配慮をもって、多様な利用者、鑑賞者の美術と美術館の概念を広げるような取り組みを各館が実施しています。

Collection Tour “Explore with Us”
：東京国立近代美術館

対話を交えながら所蔵作品のハイライトを紹介する英語プログラムです。

こども工芸館
：国立工芸館

スタンプラリー付きセルフガイドをもって会場をめぐり、絵と言葉で作品を紹介するワークシート「図鑑カード」で鑑賞のアウトプットを促すプログラム。主に夏季展覧会中に実施します。

感覚をひらく
：京都国立近代美術館

撮影：衣笠名津美

作品を手でふれて鑑賞するワークショップなど、障害の有無を超えて、誰もが美術館を訪れ、体験できるようなプログラムを行っています。

こども映画館
：国立映画アーカイブ

映画の歴史やフィルムの仕組みも学びながら、映画を鑑賞するプログラム。アニメーションや無声映画の弁士・伴奏付き上映など、日ごとに多様なプログラムを実施しています。

建築ツアー
：国立西洋美術館

ボランティア・スタッフによるツアーです。世界遺産に登録されたル・コルビュジエの本館と前庭を一緒に歩きながら案内します。参加者が「空間を体感すること」を大切にしています。

びじゅつあー
：国立国際美術館

対話をしながら作品を鑑賞するプログラム。対象年齢を細かく設定し、年齢にあわせて実施しています。

NACT YOUTH PROJECT 2024 新美塾！
：国立新美術館

13～18歳のユースがアーティストとともに表現することの楽しさを学ぶ、半年間にわたるプログラムを2022年より実施しています。

ラーニングチャンネル動画集
：国立アートリサーチセンター

美術館のワークショップ等、様々な取組を「学び」という視点で集め、動画で発信しています。

ナショナルセンターとして我が国の美術館活動全体の活性化に寄与

1. 美術に関する情報拠点

美術に関する理解促進及び国内外の美術研究促進のため、国立美術館所蔵作品等のデジタル化、データベース化を進めています。また、我が国美術の総合的な情報発信拠点として、全国の美術館と連携を進め、美術館等施設が収蔵する美術品や近現代に活躍し我が国の芸術の発展に寄与した作家、メディア芸術に関するデータベース化等も進めています。

アートプラットフォームジャパン（APJ）
全国美術館収蔵品リサーチ「SHŪZŌ」
https://artplatform.go.jp/ja/collections

日本全国の美術館・博物館が収蔵する作品のデータベースです。収録範囲は日本近現代のアート作品。各館から提供された情報に基づき、作家名、作品名、制作年、材質・技法、寸法、所蔵先等の項目が記載されています。データは約47万件超。

メディア芸術データベース
https://mediaarts-db.artmuseums.go.jp/

日本のマンガ、アニメーション、ゲーム、メディアアートのデータベースです。国内の関連機関・団体のご協力のもと、各分野の作品情報等を収録しています。データは約123万件超。

国立美術館サーチ（試験公開版）
https://crosssearch.artmuseums.go.jp/

国立美術館（東京国立近代美術館、国立工芸館、国立映画アーカイブ、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館、国立新美術館）のコレクションや情報資料を横断的に検索できるサイトです。

アートプラットフォームジャパン（APJ）
日本アーティスト事典
https://artplatform.go.jp/ja/artists

日本の近現代アーティストに関する総合事典（オンライン版）です。収録対象は日本の文化芸術の発展に寄与した作家。収録範囲の上限は明治時代以降に活躍した作家、下限は1995年以前生まれの作家です。

フィルムは記録する
―国立映画アーカイブ歴史映像ポータル―
https://filmisadocument.jp/

国立映画アーカイブの所蔵フィルムのうち、文化・記録映画やニュース映画は日本映画だけで5万本近くに及びます。これまで上映や放送等の機会が限られていたこれらの歴史映像群を、全篇視聴可能な状態で配信するウェブサイトです。令和6年度末現在で、題材も撮影場所も多彩な239作品を公開しています。

2. 全国の美術館の活動支援

全国の美術館の活動を支援する観点から、専門人材の育成、美術館活動に関する情報提供などを行っています。

美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修

国立美術館の展示室を活用しながら教員と学芸員が学び合う研修を実施しています。

キュレーター研修、インターンシップ

公私立美術館の学芸担当職員を対象としたキュレーター研修、美術館活動を担う人材の育成に資するようインターンシップを実施しています。

3. 国内外の最新の知見共有と人的交流促進

国内外の先進事例を共有するためのレクチャー・シンポジウムなどの開催や、国内外における美術館や美術関係者のネットワークの構築を推進しています。

文化財修復処置、保存修復に関するワークショップ

海外から専門家を招いて、博物館・美術館等の担当者に知見を共有しています。（2024年10月29日～31日 写真の識別と保存について）

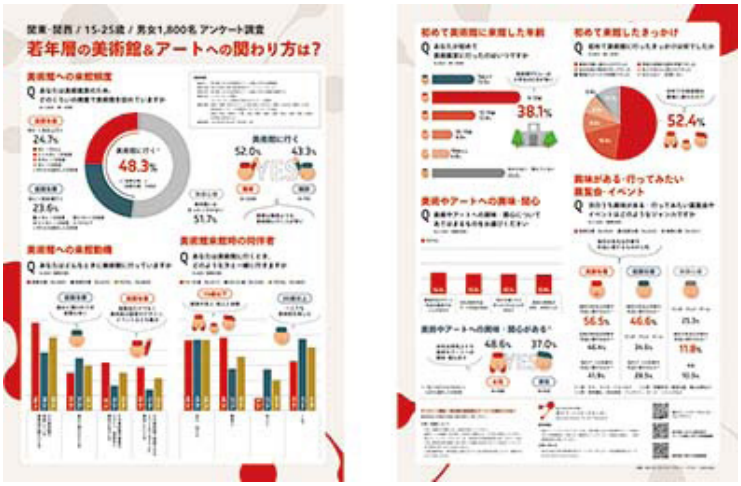
NCARスタディ・ツアー

日本で活動するキュレーターや研究者を海外に派遣し、各々の専門的知見を広げるとともに、国際的なネットワークや協働の基盤を築く機会を提供しています。
（2024年10－11月台湾）

文化的処方のはじめの一歩

「文化的処方」（健康や幸福に良い影響を与えるアートや文化活動、それらを活かした社会的な取組）についてのガイドブックを刊行しました。

美術館やアートに関する意識調査



「若年層における美術館やアート全般に対する意識調査」サマリー

「美術館に関する意識調査（関東・関西エリア）」や「若年層における美術館やアート全般に対する意識調査」を実施し、調査結果の一部をウェブサイトで公開しています。

MOMAT 東京国立近代美術館

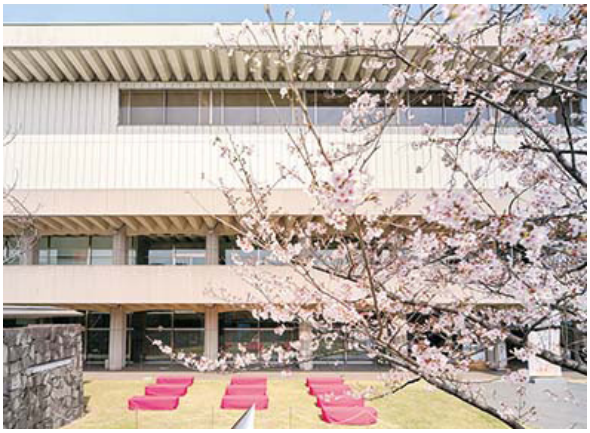
東京国立近代美術館長
小松 弥生

東京国立近代美術館は、人々が集い、美術を通して多様な価値やアイディアに出会う場所でありたいと考えています。令和6年度にコレクション展において行った、鑑賞のヒントとなるような問いかけを作品ごとに付した展示は、そのための試みのひとつです。

展覧会の企画や作品の収集にあたっては、ジェンダーバランスへの配慮の下、女性作家に光を当てることや、地域性を考慮して、これまで少なかったアジアの作家の作品収集に力をいれるなどの取組を行っています。

今後も、皆様が未来を創造するための手がかりを発見していただけるような美術館として活動してまいります。

休憩コーナー「眺めのよい部屋」



美術館の春まつり　前庭の様子（2022年撮影）　撮影：三嶋一路

東京国立近代美術館は、昭和27（1952）年に設置された日本で最初の国立美術館です。明治時代から求められていた、同時代の美術を展示する機能と近代美術を収集・保管・展示する機能とを有しています。いつでも、19世紀末から今日に至るまで、日本の近現代美術の流れを世界の潮流の中でたどるMOMATコレクション展をご覧いただくことができます。

年数回のマスコミ各社との共催展や特別展の開催のほか、所蔵品ガイドの実施、子ども対象の事業、企業向けのワークショップなど教育普及事業にも力を入れています。

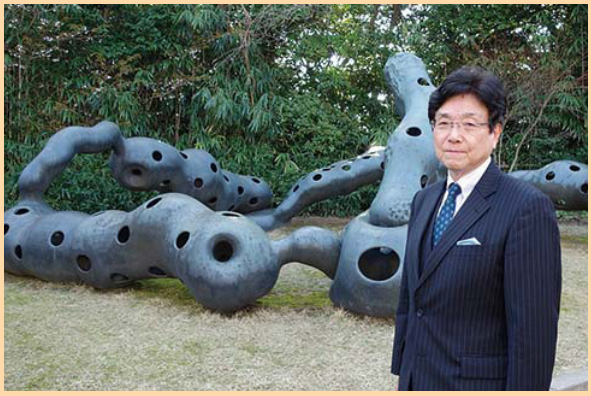
本館の建物は、谷口吉郎氏の設計によるモダニズム建築です。平成13（2001）年に、坂倉建築研究所の設計による増改築を行い、アートライブラリを開設するとともに、当時の美術館にはまだ珍しかったレストランも設置しました（現在はラー・エ・ミクニ）。

● 略年表

昭和27年（1952）	京橋・日活本社ビルを改修し、国立近代美術館が開館
昭和38年（1963）	国立近代美術館京都分館が開館
昭和42年（1967）	国立近代美術館は東京国立近代美術館となり、国立近代美術館京都分館は独立して京都国立近代美術館となる
昭和44年（1969）	千代田区北の丸公園地区の現在地に美術館（本館）が移転
昭和52年（1977）	重要文化財・旧近衛師団司令部庁舎を利用し工芸館が開館
平成11年（1999）	本館増改築工事着工のため休館
平成13年（2001）	独立行政法人国立美術館　東京国立近代美術館となる 本館増改築工事が完了
平成14年（2002）	リニューアル・オープン記念展「未完の世紀：20世紀美術がのこすもの」を開催
平成24年（2012）	開館60周年記念特別展「美術にぶるっ！ ベストセレクション 日本近代美術の100年」を開催
平成30年（2018）	フィルムセンターは独立して国立映画アーカイブとなる
令和 2 年（2020）	工芸館が東京から石川県金沢市に移転して国立工芸館となる
令和 5 年（2023）	開館70周年記念展「重要文化財の秘密」を開催

[https://www.momat.go.jp/]

国立工芸館
National Crafts Museum



国立工芸館長
山﨑　秀保

国立工芸館は、令和２年（2020年)10月に石川県金沢市に移転して５年を迎えました。日本の工芸を中心に、近代から現代へと繋ぐ個人作家の工芸作品などを収集・保管し、展覧会や教育普及などの活動を続けてきました。

令和６年度は、移転後としては初となる人間国宝の回顧展や新しい工芸の潮流を紹介するグループ展など、工芸を専門とする当館らしく伝統と創作の両面から工芸の魅力に触れていただきました。

工芸の面白みや深みは、芸術性と実用性が融合し、伝統や文化、歴史などを感じられるところにあります。これからも、皆様にとって親しみやすく楽しめる場を目指していきます。

撮影：太田拓実

国立工芸館は、昭和52（1977）年に東京国立近代美術館工芸館として東京の皇居北側に位置する北の丸公園に開館した、日本を中心とする近現代の工芸・デザイン作品を専門とする美術館です。

令和2（2020）年に、日本海側初の国立美術館である通称「国立工芸館」となり、石川県金沢市へ移転・開館。令和3（2021）年には通称を正式名称に改め、工芸文化の発信拠点としての新たなスタートを切りました。

建物は、明治期に建てられ、平成9（1997）年に国登録有形文化財となった、旧陸軍第九師団司令部庁舎及び旧陸軍金沢偕行社を、国立工芸館移転・活用のために石川県と金沢市が整備し、移築・復元したものです。

展示室

● 略年表

昭和52年（1977）	旧近衛師団司令部庁舎（昭和47（1972）年国指定重要文化財）を利用し、千代田区北の丸公園に開館
平成28年（2016）	政府関係機関移転基本方針により、石川県への移転が決定
令和 2 年（2020）	移転に向け、東京での活動を終了 旧陸軍第九師団司令部庁舎及び旧陸軍金沢偕行社の整備が完了 「国立工芸館」として石川県金沢市の現在地に移転・開館

人間国宝・松田権六の仕事場

https://www.momat.go.jp/craft-museum

MoMAK 京都国立近代美術館

The National Museum of Modern Art, Kyoto

撮影：表恒匡

京都国立近代美術館長
福永 治

京都国立近代美術館は1963年の開館以来、工芸分野をはじめ、京都画壇と称された日本画や関西の洋画など、京都を中心とする近代美術の振興に努めてまいりました。一方で、新しい美術動向や同時代の作品を積極的に紹介し、美術の窓口としての機能も果たしています。

令和6年度の各企画展では、所蔵作品を多数活用し、館の作品収集の成果を示すことができました。また、4階コレクション・ギャラリーでは季節ごとに作品を入れ替え、企画展と緩やかに連動した展示を行うなど、広くお楽しみいただいています。今後は従来の近現代美術に加え、デザイン分野にも注力し、一層魅力ある美術館を目指して活動してまいります。

緑豊かな岡崎公園、平安神宮の参道と琵琶湖疏水に面して建つ京都国立近代美術館は、京都市の誘致により、市勧業館別館を改装して昭和38（1963）年3月1日に国立近代美術館京都分館として発足。昭和42（1967）年6月1日、独立して京都国立近代美術館となりました。

当館では、京都を中心とした西日本の美術作品を絵画、版画、彫刻、工芸、建築、デザイン等から写真、映像に至るまで多様な作品やその他の資料を収集、展示して、鑑賞の機会を提供するとともに、これに関する調査研究をおこなっています。

新館の設計は槇文彦によるものです。

コレクション・ギャラリー

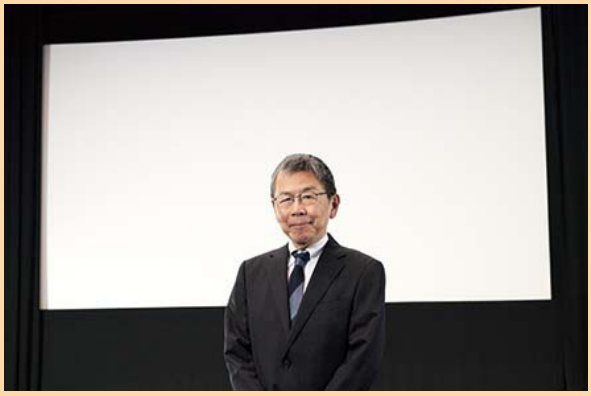
ロビー　撮影：河田憲政

● 略年表

昭和38年（1963）	前年、京都市から勧業館別館（現在地）の国への譲渡を受け、これにより国立近代美術館京都分館が設置
昭和42年（1967）	国立近代美術館京都分館は、独立して京都国立近代美術館となる
昭和61年（1986）	新館が竣工、10月25日新館開館 常設展示会場（現コレクション・ギャラリー）を開設
平成13年（2001）	独立行政法人国立美術館　京都国立近代美術館となる
平成25年（2013）	開館50周年記念特別展「交差する表現　工芸／デザイン／総合芸術」開催
令和 5 年（2023）	「開館60周年記念 Re: スタートライン 1963–1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」開催

[https://www.momak.go.jp/]

国立映画アーカイブ
National Film Archive of Japan



国立映画アーカイブ館長
栩木 章

国立映画アーカイブは、日本で唯一の映画に関する国立機関として、映画とその関連資料を網羅的に収集し、最良の環境で長期に保存するとともに、上映素材の作成や用途に応じたデジタル化を推進してきました。

令和6年度の公開事業では、京橋本館を中心に、「映画監督 田坂具隆」「メキシコ映画の大回顧」といった10を越える特集企画で古今東西300本以上の作品を上映する一方、ポーランドの貴重なアンジェイ・ワイダ資料を用いた展覧会なども開催して好評を博しました。

現在、映画フィルムのコレクションは9万本に達しており、歴史映像等のデジタル配信事業も順調にその公開作品数を増やしています。

映画の新たな発見の場所ともなる国立映画アーカイブに、是非一度、お立ち寄りください。

平成30(2018)年3月まで東京国立近代美術館の映画部門であったフィルムセンターは、平成30(2018)年4月1日に独立し、独立行政法人国立美術館の6館目の組織となる「国立映画アーカイブ」として新たな一歩を踏み出しました。本館では、大小2つの上映ホールと展示室、図書室を用いた様々な事業を実施しています。また、神奈川県相模原市にある相模原分館では、専用の施設で映画フィルムや関係資料の長期保存に取り組んでいます。

本館と相模原分館映画保存棟Ⅰの設計は蘆原義信、映画保存棟Ⅱ・Ⅲは安井建築設計事務所によるものです。

長瀬記念ホール OZU

相模原分館

● 略年表

昭和27年(1952)	京橋・日活本社ビルを改修し、国立近代美術館が開館。事業課の一部として、国立機関初のフィルム・ライブラリーを開設
昭和44年(1969)	東京国立近代美術館(本館)の施設移転に伴い、フィルムセンターを設置、翌昭和45(1970)年開館
昭和61年(1986)	神奈川県相模原市に映画フィルム専用保存庫として、フィルムセンター相模原分館が竣工
平成3年(1991)	フィルムセンター新営工事に着手
平成7年(1995)	新フィルムセンターが開館
平成23年(2011)	フィルムセンター相模原分館収蔵庫増築工事が竣工、相模原分館の保存棟を映画保存棟Ⅰ・Ⅱと命名
平成26年(2014)	映画保存棟Ⅲ(フィルムセンター相模原分館重要文化財映画フィルム保存庫)が竣工
平成30年(2018)	独立行政法人国立美術館の6館目「国立映画アーカイブ」として平成30年4月1日に設置

https://www.nfaj.go.jp/

国立西洋美術館
The National Museum of Western Art

国立西洋美術館長
田中　正之

1959年の開館以来、西洋美術の歴史に親しみ、理解を深めるための様々な活動を続け、令和6年度には常設展示のみをご覧いただいた方だけでも37万人、企画展も含めればおよそ130万人を超える来館者をお迎えしています。

当館の役割の一つは日本と西洋文化の接点となることです。日本の浮世絵からも多くを学んだモネが、晩年に描いた主題に光を当てた「モネ　睡蓮のとき」展は、来場者が80万人にのぼり、多くの方から賞賛の声をいただきました。

文化の力とは、多様な文化が影響し合い、変容していくダイナミズムにあります。そのような文化のダイナミズムを伝える場として当館をさらに発展させたいと考えています。

国立西洋美術館は、広く西洋美術全般を対象とする国内唯一の国立美術館として、昭和34(1959)年に開館しました。

当館はフランス政府から寄贈返還された松方コレクションを基礎とし、西洋美術に関する作品の鑑賞の機会を提供することを中心に、作品及び資料の収集、調査研究、保存修復、教育普及、出版物の刊行等の事業を展開しています。

本館は、ル・コルビュジエの設計によるものであり、平成28(2016)年に国立西洋美術館を構成資産に含む「ル・コルビュジエの建築作品―近代建築運動への顕著な貢献―」が、世界文化遺産に登録されました。

19世紀ホール　本館1F展示室

● 略年表

昭和34年(1959)	フランス政府―日本政府間の松方コレクション寄贈返還の正式調印 国立西洋美術館が開館
昭和54年(1979)	新館がオープン
平成10年(1998)	企画展示館を増築、本館を耐震改修(免震化)、新館を改修しリニューアルオープン
平成13年(2001)	独立行政法人国立美術館　国立西洋美術館となる
平成19年(2007)	本館が国の重要文化財に指定
平成21年(2009)	園地が国の登録記念物に指定
平成28年(2016)	国立西洋美術館が第40回世界遺産委員会において、世界遺産一覧表に記載
令和 4 年(2022)	前庭を改修しリニューアルオープン

本館2F展示室

https://www.nmwa.go.jp/jp/index.html

国立国際美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA

国立国際美術館長
島　敦彦

国立国際美術館は、平成16（2004）年11月に大阪・中之島に新築移転して20年を迎えました。昭和52（1977）年から数えると間もなく50年、第二次世界大戦後の国内外の現代美術を主導的に紹介してきました。

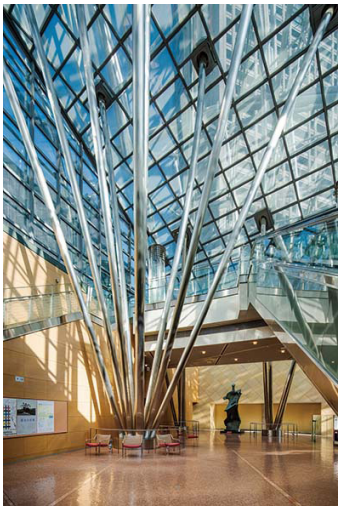
令和6（2024）年度は、気鋭の若手美術家の個展「梅津庸一クリスタルパレス」を開催したほか、社会におけるさまざまな境界を軽やかに超える近年の収蔵作品を集めた企画展「ノー・バウンダリーズ」を開催しました。現代美術が国際的に注目を集める中で、近年は非欧米圏の動向や女性作家の活動にも注視し、さまざまな切り口で収集・展示活動を展開すると同時に、将来を担う子供たちにとっても欠かせない場所として美術館が親しまれるように一層努めてまいります。

撮影：増田好郎

国立国際美術館は、昭和52(1977)年、旧万国博美術館を活用し、主として現代美術を中心とした作品を収集・保管・展示し、関連する調査研究及び事業を行うことを目的に開館し、平成16（2004）年11月に大阪・中之島に世界でもめずらしい、完全地下型の美術館として新築、移転しました。

当館は、現代美術を発信する美術館として、国内外の美術の動向を幅広く紹介し、皆様の多様な期待に応えるための活動に積極的に取り組み、歴史と文化を継承する大阪・中之島の地における文化の拠点のひとつとして活動しています。

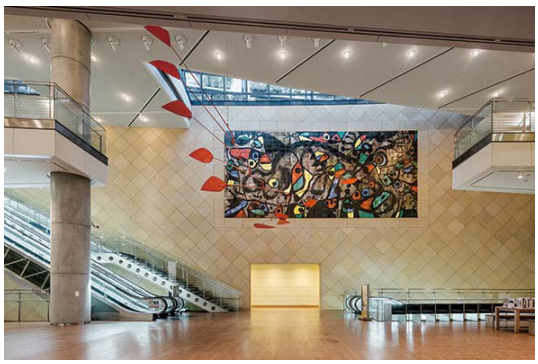
新館の設計はシーザー・ペリによるものです。



エントランス・ホール　撮影：増田好郎

● 略年表

昭和52年（1977）	旧万国博美術館を活用し、国立国際美術館が開館
平成 5 年（1993）	当館評議会において、大阪市内への新築移転の方針を決定
平成11年（1999）	新館建築工事に着手
平成13年（2001）	独立行政法人国立美術館　国立国際美術館となる
平成16年（2004）	1 月　移転準備のため、休館となる
	11月　新館グランドオープン



吹き抜け　撮影：増田好郎

https://www.nmao.go.jp/

新 国立新美術館
THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO

国立新美術館長
菅谷 富夫

コレクションを持たない国立新美術館は、幅広い世代に訴えかける多様な展覧会と教育プログラムを実施しています。作品との思いがけない出会いを五感で受け止め楽しんでいただけるよう、ダイナミックなギャラリー空間やパブリックスペースを活用した展示を心がけています。

令和6年度は、近代美術、現代美術、マンガ、パフォーマンス、建築など、多彩な展覧会と、親子や10代を対象とした教育プログラム、公募団体展を含め、年間総計158万人にご来館いただきました。当館は芸術を通して共生や多様性そして対話の重要性を伝える活動を推進いたします。

外観(正面)

ホワイエ

2024.08.27
1階ロビーで行われた
ファッションショー

© HARUNOBUMURATA 2025 SS COLLECTION

国立新美術館は、芸術を介した相互理解と共生の視点に立った新しい文化の創造に寄与することを使命に、2007年、独立行政法人国立美術館に属する5番目の施設として開館しました。以来、コレクションを持たない代わりに、人々がさまざまな芸術表現を体験し、学び、多様な価値観を認め合うことができるアートセンターとして活動しています。具体的には、国内最大級の展示スペース(14,000㎡)を生かした多彩な展覧会の開催や、美術に関する情報や資料の収集・公開・提供、さまざまな教育普及プログラムの実施に取り組んでいます。

建物の設計は黒川紀章によるものです。

● 略年表

平成 7 年(1995)	文化庁が「新しい美術展示施設(ナショナル・ギャラリー)に関する調査研究会」を設置し、基本構想についての検討を開始
平成11年(1999)	文化庁が「新国立美術展展示施設(ナショナル・ギャラリー)(仮称)設立準備委員会」を設置
平成15年(2003)	全国公募により、正式名称を「国立新美術館」に決定
平成19年(2007)	1月 開館　開館記念展他開催　4月 公募展開始
平成29年(2017)	開館10周年を記念する展覧会等を開催
令和 4 年(2022)	「国立新美術館開館15周年記念 李禹煥」開催

[https://www.nact.jp/]

独立行政法人国立美術館

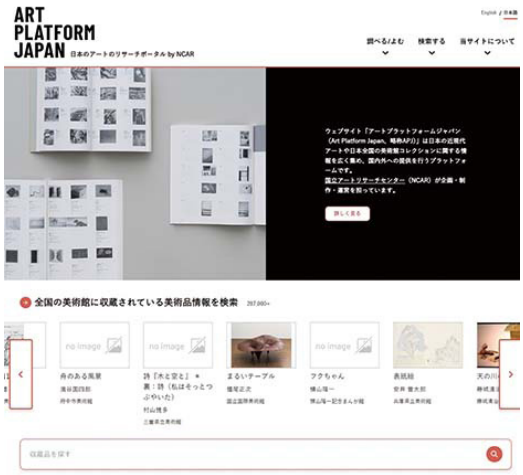
国立アートリサーチセンター

National Center for Art Research

国立アートリサーチセンター長

田中　正之

世界がグローバルに繋がるなか、私たちは多様な価値観が共存する時代を迎えています。美術館の役割も従来の芸術的価値の保存・展示・普及などに留まらず、多様性、包摂性、持続可能性、ウェルビーイングなどを視野に入れた社会的価値を築く場へと拡大しています。こうした時代に応答すべく、国立アートリサーチセンター（NCAR）が設立されました。「アートをつなげる、深める、拡げる」をミッションに掲げ、アートを社会に広く浸透させると同時に、日本のアートを国内外に発信し、専門性を深めるプラットフォームとして多角的に活動しています。



日本のアートに関する総合サイト
「アートプラットフォームジャパン」

日本のアートに関するリサーチ・センター機能のオンラインでの確立を目指し、文化庁より継承したアートプラットフォーム事業サイトを発展させ、総合的リサーチポータル「アートプラットフォームジャパン」を構築しました。

NCARシンポジウム003「美術館のアクセシビリティ―共生社会に向けて、対話のある“合理的配慮”とは?」（2024年9月23日）＝写真＝、NCARシンポジウム005「美術館の持続可能な運営モデルとは?～寄附・寄贈の可能性」（2025年3月7日）を一般公開開催。議論の模様を後日、動画でも発信しました。

国立アートリサーチセンター（NCAR）は日本の美術館活動全体の充実を図る新たな拠点として令和5年3月28日に設立されました。美術館、研究機関にとどまらず国内外の多様な組織・個人と連携し、コレクションの活用促進、情報資源の構築、ラーニング（教育普及）の拡充、日本のアーティストや学芸員の国際的なネットワーク構築と国際発信の強化などに取り組んでいます。

● 略年表

令和 3 年（2021）「アート・コミュニケーションセンター」（仮称）設置準備室開設
令和 4 年（2022）「国立アートリサーチセンター」（仮称）設置準備室に改称
令和 5 年（2023）国立アートリサーチセンター設立

アーティストの国際発信支援プログラム

日本のアートシーンの国際的なプレゼンス向上に寄与するため、国際展に出展する日本のアーティストの活動支援と発信強化を行いました。（令和6年度に支援した国際展の展示風景）

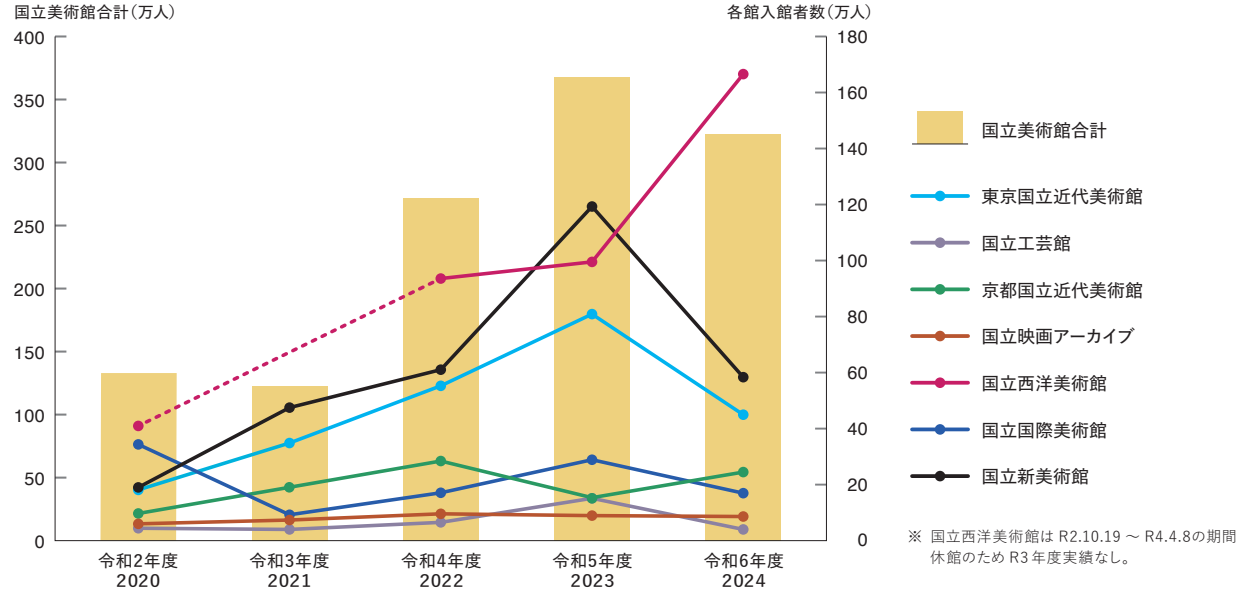
https://ncar.artmuseums.go.jp/

1. 国立美術館入館者数（過去5年間）

	令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023	令和6年度 2024
東京国立近代美術館	184,815	355,023	552,805	808,638	445,748 (71,933)
国立工芸館	43,654	40,217	66,300	152,923	40,299 (6,448)
京都国立近代美術館	98,576	188,006	282,073	154,637	241,257 (34,798)
国立映画アーカイブ	59,218	76,058	98,393	93,538	85,573 (2,851)
国立西洋美術館	411,136	—	939,047	994,810	1,666,056 (174,702)
国立国際美術館	343,152	93,486	171,033	287,976	169,813 (23,403)
国立新美術館	193,053	475,764	614,502	1,195,714	581,746 (75,091)
国立美術館合計	1,333,604	1,228,554	2,724,153	3,688,236	3,230,492 (389,226)

※ 各館が主催した所蔵作品展・企画展、NFAJの上映会・展覧会の入館者数の合計。
※ 国立西洋美術館は R2.10.19 ～ R4.4.8の期間休館のため R3 年度実績なし。
※ 括弧内は外国人入館者の人数(目視により計測)。

■過去5年間の国立美術館入館者数の推移



※ 国立西洋美術館は R2.10.19 ～ R4.4.8の期間休館のため R3 年度実績なし。

◎ 公募団体等への展覧会会場の提供（国立新美術館）

	令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023	令和6年度 2024
利用団体数	34 団体	81 団体	80 団体	82 団体	83 団体
入館者数	189,008	485,413	878,858	1,082,300	1,000,061

2. 展覧会等の開催

◎ 所蔵作品展の開催

	令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023	令和6年度 2024
開催日数	781	754	1,127	1,069	1,058
展示替回数	17	15	19	16	17
入館者数	370,491	287,226	950,060	1,073,024	1,104,214

コレクションを活用した所蔵作品展では、所蔵作品を様々な角度から鑑賞・理解してもらうため、各館において特定のテーマや開催中の企画展に沿った小企画展、テーマ展等をあわせて開催しています。

◎ 企画展の開催

	令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023	令和6年度 2024
開催日数	1,019	1,081	1,265	1,389	1,342
開催回数	18	23	24	27	25
入館者数	903,895	865,270	1,675,700	2,521,674	2,040,705

◎ 上映会の開催（国立映画アーカイブ）

	令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023	令和6年度 2024
開催日数	243	248	288	291	247
開催回数	10	13	11	12	11
入館者数	49,089	58,432	78,091	71,266	69,159

◎ 展覧会の開催（国立映画アーカイブ）

	令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023	令和6年度 2024
開催日数	196	217	255	254	261
開催回数	3	3	3	3	3
入館者数	10,129	17,626	20,302	22,272	16,414

3. 美術作品及び映画フィルムの収集数（過去５年間）

区　分		令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023	令和6年度 2024
美術作品（点）	新規収蔵数	536	299	401	538	839
	作品点数計	44,873	45,172	45,573	46,111	46,950
フィルム（本）	新規収蔵数	635	2,167	496	843	2,876
	作品本数計	83,744	85,911	86,407	87,250	90,126

4. 所蔵作品の貸与数（過去５年間）

◎ 美術作品

	令和2年度 2020		令和3年度 2021		令和4年度 2022		令和5年度 2023		令和6年度 2024	
	件	点	件	点	件	点	件	点	件	点
東京国立近代美術館	42	141	56	275	75	339	77	306	69	382
国立工芸館	6	27	13	54	12	102	13	158	17	114
京都国立近代美術館	34	221	50	548	58	949	54	1,063	57	888
国立西洋美術館	9	37	6	379	14	61	9	100	16	214
国立国際美術館	15	199	13	137	14	66	18	55	20	96
合計	106	625	138	1,493	173	1,517	171	1,682	179	1,694

◎ 映画フィルム

	令和2年度 2020		令和3年度 2021		令和4年度 2022		令和5年度 2023		令和6年度 2024	
	件	点	件	点	件	点	件	点	件	点
国立映画アーカイブ	42	73	61	155	81	166	73	132	79	162

◎ 映画関連資料

	令和2年度 2020		令和3年度 2021		令和4年度 2022		令和5年度 2023		令和6年度 2024	
	件	点	件	点	件	点	件	点	件	点
国立映画アーカイブ	3	55	5	138	5	83	9	161	9	93

役員等

（令和８年４月１日現在）

理事長
田中　正之　TANAKA Masayuki

理事・本部事務局長
石﨑　宏明　ISHIZAKI Hiroaki

理事
渡部　葉子　WATANABE Yohko

監事
田中　淳　TANAKA Atsushi
茶田　佳世子　CHADA Kayoko

東京国立近代美術館長
小松　弥生　KOMATSU Yayoi

国立工芸館長
山﨑　秀保　YAMAZAKI Hideyasu

京都国立近代美術館長
福永　治　FUKUNAGA Osamu

国立映画アーカイブ館長
栃木　章　TOCHIGI Akira

国立西洋美術館長
田中　正之　TANAKA Masayuki

国立国際美術館長
島　敦彦　SHIMA Atsuhiko

国立新美術館長
菅谷　富夫　SUGAYA Tomio

国立アートリサーチセンター長
田中　正之　TANAKA Masayuki

予算

収入予算額

（単位：百万円）

	令和７年度予算	令和６年度予算
展示事業等収入	1,679	1,679
運営費交付金	8,143	8,050
受託収入	0	0
施設整備費補助金	100	100
寄附金収入	650	650
合計	10,572	10,479

支出予算額

（単位：百万円）

	令和７年度予算	令和６年度予算
運営事業費	9,822	9,729
人件費	1,694	1,538
一般管理費	799	954
事業部門経費	7,329	7,237
受託事業費	0	0
施設整備費	100	100
寄附金事業費	650	650
合計	10,572	10,479

国立美術館へのご寄附のお願い

国立美術館は、日本における芸術文化の創造と発展、国民の美的感性の育成を使命とする美術振興の中心拠点です。美術作品を約４万７千点、映画フィルムを約９万点所蔵し、毎年多くの方をお迎えしています。また、より美術に親しみ楽しんでいただけるよう、展覧会事業や教育普及事業なども積極的に展開しています。皆さまからのご支援により、こうした活動の充実や、次世代への貴重な文化財の継承が可能となります。

◉返礼：一定以上のご寄附をいただいた方に、展覧会の招待券や、オリジナルグッズを進呈いたします。

展覧会・上映会

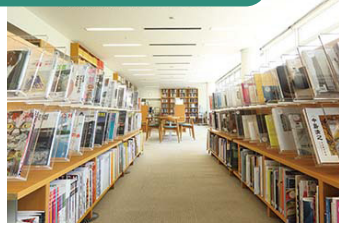
調査・研究

所蔵作品・フィルムの修復

教育普及

建物・設備の整備

情報・資料の収集



国際発信・連携

税制優遇について

独立行政法人国立美術館へのご寄附に対しては、寄附金控除（所得控除）が適用されます。寄附金受領の翌月に「寄附者情報」欄にご入力いただいたご住所に領収書をお送りしますので、確定申告の際にご利用ください。お住まいの都道府県・市区町村が、条例で独立行政法人国立美術館を寄附金控除の対象法人として指定している場合、個人住民税額の控除を受けることができます。詳細については各自治体の条例をご確認ください。

国立美術館オンライン寄附サイト

寄附の詳細やお申込み方法、各種問合せ等をご案内しています。
また国立美術館各館では、「ご寄附のご案内」リーフレットを配布しております。

独立行政法人 国立美術館
オンライン寄附サイト
https://kifu.artmuseums.go.jp

国立美術館では、遺贈を受け付けております。大切な作品を次の世代に確実に残すことができるよう、ご支援をお願い申し上げます。ご関心をお持ちの方は、国立美術館サイトの「美術館へのサポート」ページをご覧ください。

国立美術館サイト
美術館へのサポート
https://www.artmuseums.go.jp/support

各館の概要

	東京国立近代美術館	国立工芸館	京都国立近代美術館	国立映画アーカイブ
施設				
建物 延べ面積	19,050.6㎡ うち展示面積 4,459.0㎡	3,072.22㎡ うち展示面積 703.76㎡	9,761㎡ うち展示面積 2,604㎡	16,479㎡ うち展示面積 1,365㎡ （相模原分館を含む）
所在地	東京都千代田区 北の丸公園3-1	石川県金沢市 出羽町3-2	京都府京都市左京区 岡崎円勝寺町	東京都中央区 京橋3-7-6
役割 ・ 任務	近現代の美術、工芸に関する作品その他の資料の収集・保管・展示・調査研究活動等を実施。	近現代の工芸・デザインに関する作品その他の資料の収集・保管・展示・調査研究活動等を実施。	特に京都・西日本を重点に近現代の美術、工芸に関する作品その他の資料の収集・保管・展示・調査研究活動等を実施。	映画文化振興の中枢的機関として、映画に関する収集・保存・活用・上映・調査研究活動等を実施。
収蔵作品 ※1	14,201点	4,398点	15,411点	109,448本
入館者数 ※2	445,748人	40,299人	241,257人	85,573人
館長	小松 弥生	山﨑 秀保	福永 治	栩木 章
職員数 ※3	28人	12人	18人	22人

	国立西洋美術館	国立国際美術館	国立新美術館	国立アートリサーチセンター
施設				独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンター National Center for Art Research
建物 延べ面積	17,369㎡ うち展示面積 4,420㎡	13,487㎡ うち展示面積 3,811㎡	49,709㎡ うち展示面積 14,000㎡	—
所在地	東京都台東区 上野公園7-7	大阪府大阪市北区 中之島4-2-55	東京都港区 六本木7-22-2	東京都千代田区九段北1-13-12　北の丸スクエア2階
役割 ・ 任務	仏政府から日本国政府に寄贈返還された松方コレクションを中心に西洋美術に関する作品及び資料の収集・保管・展示・調査研究活動等を実施。	日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするため、主に1945年以降の現代美術に関する作品その他の資料の収集・保管・展示・調査研究活動等を実施。	国立のアートセンターとして、全国的活動を行う美術団体の展覧会等への会場の提供及び新しい美術動向や現代作家を紹介する自主企画展の開催、国際発信等を実施。	国内外の美術館、研究機関をはじめ関係者と連携・協力し、アート振興の基盤整備及び国際発信と持続的な発展に寄与するため、国立美術館のナショナルセンターとしての機能の強化を図り我が国の美術館活動全体の充実に寄与する。
収蔵作品 ※1	6,779点	8,303点	—	—
入館者数 ※2	1,666,056人	169,813人	581,746人	—
館長	田中 正之	島 敦彦	菅谷 富夫	田中 正之
職員数 ※3	25人	18人	25人	12人

★法人本部の常勤職員数は28人（令和8年4月1日現在）。
※1　収蔵作品は令和7年3月31日現在の数（寄託作品を含む）。
※2　入館者数は令和6年度実績（主催事業（所蔵作品展、企画展、国立映画アーカイブ上映会・展覧会）の入館者数）。
※3　職員数は令和8年4月1日現在の常勤職員の人数。

独立行政法人国立美術館本部事務局
東京国立近代美術館内
〒102-8322　東京都千代田区北の丸公園3-1
TEL. 03-3214-2561　FAX. 03-3214-2577
URL. https://www.artmuseums.go.jp/

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。